



★ 埴谷雄高作品集

河出書房新社

10



神の撲滅から……—富岡幸一郎

『死霊』 遍歴抄—鈴木貞美

埴谷雄高と台湾—川村湊

カントとデモノロギイ—笠井潔

一からの言葉の編み直し—竹田青嗣

埴谷さんと駒井さんと杉浦さんと—川西政明

埴谷雄高作品集 10 ©1987

一九八七年二月二五日印刷 一九八七年二月二七日発行



著者——埴谷雄高

装画——駒井哲郎 装本——杉浦康平

発行者——清水 勝

発行所——株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二—三—二 電話 東京四〇四—二〇一 営業 四〇四—八六一 編集 振替 東京〇—一〇八〇二

印刷者——大柴守子 印刷所——株式会社享有堂印刷所

製版印刷——凸版印刷株式会社

製本所——小高製本工業株式会社 定価は函・帯に表示しております

Printed in Japan ISBN4—309—60760—8

ドストエフスキイ論集



目次

9—10	序詞——アンケート
------	-----------

I

13—15	「ドストエフスキイ論のこと」
-------	----------------

16—25	ドストエフスキイの変貌(一)
-------	----------------

26—35	ドストエフスキイの変貌(二)
-------	----------------

36—48	ドストエフスキイの変貌(三)
-------	----------------

49—68	夜の思想(一)
-------	---------

69—70	夜の思想(二)
-------	---------

71—84	《自分のこと》
-------	---------

85—103 苦悩の均衡

Ⅱ ドストエフスキイ その生涯と作品

107—115 成長する作家

116—123 幼年時代の魂の形成

124—132 青年時代の精神の形成——『貧しき人々』

133—142 ペトラシエフスキイ事件、シベリヤ、『死の家の記録』

143—150 苦悩の準備期

151—157 作家の変貌

158—171 『罪と罰』

172—186 『白痴』

187—199 『悪霊』

200—211 『カラマーゾフの兄弟』

212—221 ドストエフスキイの位置

Ⅲ

225—229 不可能性の作家として

230—232 読者と作中人物

233—234 不死身な作家

235—237 思索の坩堝

238—243 亡命者についての文学

244—248 『白痴』寸感

249—251 自然のなかの死——忘れ得ぬ断章

252—255 ナスターシャ・フィリップヴナ

256—262 『悪霊』——私の古典

263—267 『悪霊』にとらわれた時代

268—271 『カラマーゾフの兄弟』鑑賞

272—276 大審問官の顔

277—279 『作家の日記』

280—282 ドストエフスキイと私達

283—288 埴谷雄高とドストエフスキイと私—加賀乙彦

289—305 解題—白川正芳

序詞
アンケート——現代小説に関する三つの問

ドストエーフスキイの会編集部

一、現在のあなたの創作現場において、ドストエーフスキイの文学はどのようなインパクトをもっていますか。

二十世紀はドストエーフスキイの世紀であるとは私は述べてきましたが、いまはそのテーゼがおよそ文学にかかわるものすべてに普遍化したと思つています。

二、あなたにとつて興味深い二十世紀の小説を三つ挙げてください。

ブルースト『失われし時をもとめて』

ジョイス『ユリシーズ』

マン『魔の山』

三、いま小説以外で熱中しているものはなんですか。

人類死滅のかたちについて。恐竜は外的条件によつて絶滅しましたが、数百億年後、地球を「考古学」的に調べにきた或る種の知的存在によつて、嘗て地球に存在した「人間なるもの」は、ひたすら自己のみが正しいと思う愚かな内的条件によつて、宇宙時間の十万分の一である数万年かけてようやく「自殺しおせた」不思議な生物であるとして、発掘されるだろうことです。このこともラスコーリニコフの夢がすでに予言しているところがあります。

「ドストエフスキイ論」のこと

「近代文学」が小学館から出されることになってからそれほど時間がたつていない時期なので、昭和三十三年頃であつたろう。私達は毎週一回、編集会議を小学館内の一室でおこない、帰りはたいいてい鈴蘭通りのうなぎ屋の二階で、山室静、佐々木基一、私の三人はまず酒をのみ、平野謙、本多秋五、荒正人の三人はいきなり鰻重を食べながら、そのはじめから終りまでエネルギー恒存の法則通り永劫から永劫にわたつて喋りに喋りつづけている荒発言に聞きいつていたが、その当時の小学館の建物の側面に向つて岩波書店の入口があり、いわば、古い小学館と古い岩波書店は、現在と違つて、横に向きあつた隣組だつたのである。そして、その岩波書店のすぐ裏が鈴蘭通りで、岩波書店の真裏にあたる箇所にある奥行きの深い喫茶店に、時たま私達がいると、岩波書店の誰かが必ずそこにいたのである。

そうした時期の或るとき、当時、新書の係だつた田村義也が私に、新書でドストエフスキイを書くことを勧め、しかも、「埴谷さん、新書を出せば、埴谷さんとしては一生に初めてまとまつた金がいりますよ」とまで親切に述べてセンドウしてくれたのである。

私は、田村義也の好意にこたえて、即座に引きうけたものの、その後長く長くさつぱり書かなかつたので、親切な田村義也に合わせる顔がなくなつたが、やがて新書の係が小川壽夫に代り、さつぱり書かぬ私を待つていてはだめだと判断した小川壽夫は、はじめの部分を岩波書店の雑誌「文学」に載せ、その後半部を書き下しにするという案をたてたのであつた。済まない思いに満ちていた私は、この小川壽夫の案に従つて、昭

和三十八年五月号の「文学」に、『ドストエフスキイの変貌(一)』を載せたあと、翌三十九年三月号まで、『夜
の思想』、『《自分のこと》』、『苦悩の均衡』など七回にわたって書いたのである。ところで、その後半部の書
き下しができない裡に、私はNHKのFM放送で、ドストエフスキイについて十回話し、それが、昭和四十
年十一月に『ドストエフスキイ——その生涯と作品』となつて日本放送協会から出版されたのである。その
「あとがき」に、私は、「放送という性質上、本書は、自分でも珍らしいと思うほど平易な構成をとつていま
すけれども、私はこのほかにドストエフスキイについての論考の勝つたいささか難かしい書物を書くことし
ています。その書は、いろいろこねまわして容易にできませんけれど、できあがつたときは、あわせ読
んでもらえれば幸いです。」と殊勝にも記しており、当時の気分としては、後半部の書き下しを書きあげ、
深い恩恵をうけたドストエフスキイに万分の一なりとも報いたいと「本気」で思つていたのである。

ところが、時間がたてばたつほど、「文学」に書いたドストエフスキイ論を読み返してみても、そこにドス
トエフスキイの驚くべき堅固な核心に迫る深さも奥行きもないことに、われながら、うんざりしたのである。
それまでに書かれたドストエフスキイ論を世界的にみると、メレジコフスキイ、ローザノフ、ベルジャ
エフにはじまり、ヨーロッパの諸国をつぎつぎと席捲したドストエフスキイの波は、マリにせよ、ジイドに
せよ、(また、遠く、小林秀雄にせよ)、その最もよい精神の部分をドストエフスキイからうむをいわずひ
きだされ、その論者達の著作のなかでも殊に優れた論考が招来されているのである。それらを眺めると、私
は自身の「文学」の論考にうんざりし、ドストエフスキイに「本気」で恩返しするとすれば、こうした至ら
ぬ論義をつづけるより、むしろ『死霊』を書くことのみにしか私の渾身の努力の方向はないと思ひいたつた
のである。そして、こんどは、ときどき催促する小川壽夫に対して、顔を合わせられなくなつたのである。
そして、小川壽夫が催促することをついに諦めるまで、私の内面における罪障感、ひたすら増大しつづ
つたのである。

その内面の罪障感がいささか和らげられたのは、江川卓が優れた『ドストエフスキイ』の岩波新書を出し